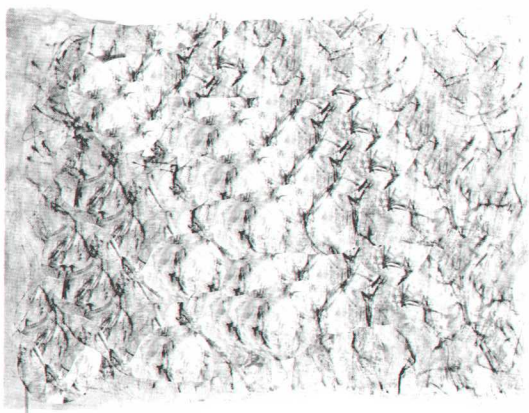


吉田知子
父の墓

新潮社

父の墓——吉田知子



新潮社

父^{ちち}
の
墓^{はか}

昭和五五年四月五日印刷
昭和五五年四月一〇日発行

著者 吉田知子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一—

（編集部） 03—二六六—五四—

振替東京四—八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 植木製本株式会社

定価 九八〇円



© 1980, Tomoko Yoshida
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

《目次》

父の墓 5

海辺の家 37

人捨て 69

脳天壊了 95

冥王星 129

装画——難波田龍起

吉田知子創作集——父の墓

父
の
墓

父は遠くなったり近くなったりした。

明日にでも帰ってくるのではないかと思う日もあった。そんなときは、父はすぐ身近にいた。布を爪で強く引搔く音が聞えた。短気で癩性な父は苛だつと右手の拇指の爪を右膝に忙しくこすりつける癖があった。

いなくなった頃は玄関の戸があく度に父ではないかと思った。私の、そういう気持が強すぎるために、それに阻まれて父が帰れないのではないかと考えたこともあった。何度も父が死んだ夢を見た。父は大きな木の樽の中にはいつていた。汚い樽だった。蓋をあげると父の死体は、どろどろに腐爛して塩辛のようなものになっている。いくら見ても顔も手足もわからなかった。私は夢の中で声をあげて泣いた。

いまはもう父が帰ることはほとんどありえないだろう。しかし、死んだことが確認されていない限りは万に一つの可能性はある。ときどき、何のきっかけもなく、父が帰ったらどうしようと考えていることがある。それは、おそれに近い感情だった。二十年前は、父が帰ってきたら生活が楽になるだろうと思って父を待った。十年前は父のために一家共倒れになるのではないかと心配し

た。いまは父が帰っても困りはしない。父は次の間つきの書齋を要求したりはしないだろう。だから、私のおそれは生活上のものではない。私は見知らぬ老人がいきなり父として目の前に現れるという想像に怯える。私は三十代の父、私より若い父しか知らない。父は、よく肥った横柄な中年男で、まだどこにも老いの徴候は見られなかった。父は帰ってくれば、当然、自分の妻と長女のいる私たちの家に住むことになる。この家は母が建てたもので四年前から私たち夫婦が同居しているのだから、もし父が戻ってきて手狭というのであれば出て行くのは私たちのほうだろう。どちらにしても母は父と暮すことになる。それは喜ぶべきことのはずだったが、いまとなつては必ずしもそうとばかりは言えない。第一に、母は極端なほどの老人嫌いだった。最近ことにその傾向が強い。それも、おばあさんはよくて、おじいさんを嫌う。それは理非を超えた生理的なものらしかった。平生は抑えている感情の強さが、そういうときは、むきだしになる。夫だからという理由で父が例外になりうると思われぬ。彼らは恋愛結婚ではなかったし、母は父の風采のあがらぬことをずっと不満に思っていたらしいふしもある。その風采のあがらぬ父が母の嫌悪してやまぬ他の老人たちと比較して、よりましな姿恰好の老人になっているはずもない。私の知っている父は美男ではなかったが恰幅はよかった。経済力もあった。その点で夫としての資格に欠けてはいない。母も妻としては満点だったろう。夫婦仲は円満だった。父は母に迷惑がられないがらも、母にいろいろな高価なものを買い与えるのを楽しみにした。母は娘たちが借金を申しこむと、すぐにその話を持ちだす。

「あなたたちのお父さまは結婚したてでも毛皮のオーバーを買ってくれたわ。あの頃は毎日のように外へ食べに行ったし。子供ができてからは、そもいかなかったけど。そのかわり出張する

度に変なものを買ってきてくれて困ったわ。指輪だとか、金髪娘に似合いそうな派手なワンピースとかね。どういうわけかしら、お金のことなんか、なんにも考えなかったわ。ふしぎねえ」

その言いかたには若い頃の夫と自分を懷しんでいる甘さは大してなかった。それよりも自分に對する無邪氣な誇らしさのほうが強かった。

父は今年の二月で満六十六歳になる。痩せていても肥っていても間違ひなく老人だろう。母は四十を少し過ぎたくらいの男でも情け容赦もなく「おじいさん」と呼ぶのだから。それに、父が母の満足する経済力を持つて歸ってくることもまずないだろう。金のない、みつともない老人がある日突然母と同じ部屋で暮し始める――。見合で、いやいや結婚した男で、しかも三十年間、もつとも苦しかった時期に、自分の意志ではないとしても何一つしてくれなかった。その男の生死がわからぬために再婚もできなかった。母は、いわば女ざかりを棒に振ったのだった。そして、六十近くなつて平穩無事な老後の見通しがたつたいま、このこ戻つてきて主人顔をしようとする男。父のほうも三十年、楽だったはずもなく、おそらく苦勞でよれよれになつて、ここまで辿り着くのである。父も悲しい。母も悲しい。

歸つたほうがいいのか、歸らないほうがいいのか。歸らないでくれなどと、どうして言えよう。私は父の夢を見ることをおそれた。父に對してどんな顔をしたらよいかわからなかった。幸か不幸か、この數年、私は父の夢を全然見ない。波状に遠くなつたり近くなつたりしながらも父の記憶は確實に少しづつ薄れはじめた。その薄れかたは死んだ祖父たちとは違つてゐる。祖父たちは順序よく自然に遠くなつていった。十一年前と十九年前に死んだ祖父たちは二十九年前に別れた父よりすでに遠くなつてゐる。彼らは私の中でやさしく風化されていき、もう完全に別世界

のものになってしまった。

祖父たちに対しては私は父よりも愛着が濃かった。父方の祖父は十一年前に死んだが、私に最も強い影響力を与えているのは、この祖父だった。彼は私にとって父であり師であり、この世で最も魅力のある男でもあった。祖父は中風で三年寝ていてから死んだ。私は、その間に一回見舞に行っただけだった。祖父は頭はしっかりしていたが口がよくまわらなかった。自力で蒲団の上に上半身をおこすのがせいっぱいだった。私は、そういう状態の祖父を見るのが辛かった。達筆だった祖父の最後の年賀状は字が大小不揃いでいびつに歪み、葉書に斜めになっていた。それだけでも私は胸が詰って慌てて見えないところへしまいこんだ。私は祖父の葬式にも行かなかった。行きたくなかった。ようやく氣をとりなおして四十九日に行くと、祖父の寝ていた部屋の小机に昔のアルバムが積まれてい、その横に古い表札が置いてあった。アルバムと一緒に袋戸棚にでもしまつてあったのだろう。祖父は娘婿の家に身を寄せるようになってからは、その表札は使わなかった。娘婿の貧弱な表札に遠慮して自分は名刺を貼りつけるだけにした。生活費の面倒まで見てもらっていたわけではないが、そういうことのけじめのきびしい人だった。私は、その表札を貰ってもいいかと訊いた。祖母や叔母たちは少し妙な顔をしながら頷いた。表札は煤びた濃い灰色になっていた。それでも特徴のある祖父の字は薄れてはいない。私は重い厚い表札を手にとった。それから、突然立ちあがると玄關脇の人のいない小部屋へ駆けこんだ。剛情に祖父の死を認めまいとしていたのが表札一枚で崩れてしまったのだった。

母方の祖父は父方の祖父とは対照的な性質だった。彼には私は始終叱られていた。父方の祖父なら教育上の配慮から一言注意しておくという感じたが、彼のほうはまず自分が立腹して叱りつ

けるのだから迫力がある。この祖父が一度「いかん」と禁止したら、もう駄目だった。母にも似たところがある。母は私が志望大学を決めたとき凄じい権幕で反対した。その大学は学生運動が盛んなところで、当時、連日の新聞にその記事が出ていた。祖父や母に言わせると「アカ」の大学だった。どういうわけか昭和二十年代の大人たちは「アカ」という言葉が好きらしく、よく使った。中学生時代、私が授業に出ないで図書館で本を読んでいたときも「お前はアカだ」と言われた。十三や十四の子供にそんなことを言っても理解できるはずもない。私は先生の憤激した表情から、それが非常に悪いことなのだろうと漠然と感じただけだった。

母は言った。

「どうしても、その大学へ行きたいというのね。それならそれでもいいわ。私は、お父さまに申しわけありませんから、お父さまのお墓の前であんたを殺して私も死にます」

私は仰天して簡単に志望を放棄してしまった。もちろん、そのとき、父の墓などまだなかった。現在は便宜上死亡となっている父の戸籍も生存になっていた。だから、どこから見ても母のおどしは道理に合わなかったのだが、私には、てきめんに効果を發揮した。私の脳裡には、たちまち大きな重々しい父の墓があらわれ、その前に白い絹の着物を血みどろにして倒れている母と自分の姿が見えた。実際、私の家には恰好な日本刀もあった。

そんな芝居がかりの大時代な言いかたに二十近くになっている私がおそれおののいたのには、私だけにしかわからぬ理由があった。

私の頭には一つの光景がこびりついていて。私は母の白装束を見たことがある。いや、そう思いこんでいるだけのことも知れない。本当は両親の断片的な会話を夢うつつのうちに聞いた

だけのことで、何も見たわけではないのかも知れない。それは、私の十歳前後のことだった。

深夜、床の間のある八畳に母が険しい顔をして正座していた。母は白無垢の絹の着物を着ている。白粉を厚く塗り口紅も濃くつけていたが髪はぼうぼうに乱れていた。私は、それまでに母が髪を乱しているのも厚化粧したのも見たことはなかった。母は膝の上に短刀を置き、それを両手で握りしめていた。

「では、さようなら。私は、いまから死にます。昨日、そう言ったでしょう。あなたは約束を破ったのですから」

そのときになって、母の前に父がいるのに気がついた。父の後姿は大きな黒い影のように、ぼんやりとしていた。

いま思えば、あれは単純な、ありふれた夫婦喧嘩だったに違いない。父が外泊か朝帰りかして、それを母が咎めていたのだろう。声が大きかったので私が目をさまし、母のその言葉だけ聞いたのだろう。しかし、たしかに私の目の底には母の白装束姿がある。どこかで見たことは間違いない。私の両親は子供の前で争ったことは一度もなかったで、その深夜のできごとは私にとって事件と言ってもよかった。私は、そのことを誰にも言わなかった。その代り、それ以来、母を、いつ実際に白い着物を着るかわからぬ存在として見るようになっていた。学校に行っているときでさえ、家でいま母が白い着物を着ているかも知れないと思いだすと何も手につかなくなった。私にとって、それ以上におそろしいことはなかった。来年還暦を迎える母は「白い着物」のことなどは、とうに忘れている。私も、その恐怖はなくなつたが、寿命には逆らえない。父と別れ、母方の祖父、父方の祖父母としの順に死んでいき、いまは母だけしか残っていない。

死んだ人に逢いたいと思ひ続けると、通る人が皆、同じ顔に見える。母方の祖父が死んだあと五、六年、ひよっとすると十年以上も経ってからでも、私は道で彼にそっくりの老人をみつけた。見た瞬間、祖父だと信じこむほど似ている。そうすると、私は夢中でその人の近くまで行つた。どうしても祖父でないことをたしかめずにはいられなかった。お蔭で勤めに遅刻したり、とんでもない方向へ行くバスに乗ってしまつたりした。それは母方の祖父にだけで、父方の祖父には、そういうことはなかった。頭の禿げ具合や歩きかたの似ている人を町で見かけても、なつかしく思うだけで本気で後を追つたりはしない。彼は軍人氣質で未練がましさを嫌つたから化けて出たりはしないだろう。母方の祖父のほうは、いかにも迷い出しそうな人柄だった。子供や孫の行末を気づかい、くよくよ心配し、ついつい出てきてしまう。彼なら幽霊になつてもふしぎではない。父だつたらどうだろう。父が死んだとしても、私には父が何歳で死んだのかわからない。父は私にわからせるためには別れたときの年齢で現われなければならない。あのとき、父は三十七歳だつたらうか。そんな若い幽霊は氣味が悪い。父と知れば二重にぞつとする。

「お父さん、どうしたのです。どういふつもりなんですか。そんなところで何をしていますのですか」

こわがつては悪いので、私は、そう訊く。どうしても詰問口調になる。祖父たちの幽霊にはできるだけのことをする用意があるが父の幽霊に棲みつかれたら当惑する。父がなぜ出てきたのか、何に執着しているのか、どうすれば喜ぶのか、何を考へているのか、私には見当もつかない。私は父の幽霊には他人行儀につきあふことしかできない。

私が三十を越える頃までは父は父だった。不在であつても父という確固としたものであつて、

男としても人間としても考えたことはなかった。三十を過ぎてから、私はしきりに自分が父親に似ているのではないかと思い始めた。人に言われたのではなく、心中ひそかに思う。それは、よい感じではなかった。父のもとで成長していてもそうだろうか。息子がある日、齒を磨いたあとの咳払いの音が父と同じであることを発見したとしたら——それは、むしろ微笑ましいことではなからうか。私にも母に關しては、そんなことがある。子供の頃、母のスカートは、いつも特別なおいがしていた。母が立ったり坐ったりすると、ふんわりと、そのなおいに包まれるのだった。それは野菜のにおいでも香料のにおいでもない。少しだらしなくて、獣めいた生暖い母の体臭だった。このごろ、私は自分にもそれがあることを知った。私はそれを悪い感じでは受けとらなかつた。まるで自分の成熟のあかしであるかのように思った。

息子が父に似て、娘が母に似るのは当然であるとしても娘が父に似るのは困ったことだった。ましてや、娘は父に對して、自分の戸籍上の父であるという以上の氣持はいだいていない。父はよいところの少い人間だった。よいところは皆隠してしまいたがるおかしな偽惡趣味もあつた。実は、そこなどは正に私の受け継いでいる点なのだが。首と腕の短いところ、背が低くて肥つているところ。人の惡口を言つて樂しむ惡癖。たまに人を褒めたりすると、それが心からのものであつても、途中で照れてしまつて、いつのまにか毒舌に変化してしまふ。体の外見上の特徴を別にすれば、父の性質のそういうところまでは本当は私は知らない。知らないままに、それらは父のものだ、父からの悪い遺伝なのだと決めてしまつてゐる。いくらかの根拠はあつた。それらのある部分は父方の叔母たちのものでもあつたから。そしてまた、父を知つてゐる人たちの話からでも、私の意見はくつがえされることはなかつた。父は私と同じように、だらしなくて怠けもの